

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00463

研究課題名（和文）近代日本のレトリックと階級闘争 「プロレタリア雄弁学」の理論と源流

研究課題名（英文）Rhetoric and Class Struggle in Modern Japan: The Origin and Theory of Proletarian Eloquence

研究代表者

青沼 智 (Aonuma, Satoru)

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：50306411

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、第一次日本共産党の創立メンバーの一人であった近藤栄蔵が唱えた「プロレタリア雄弁」のレトリックとしての特徴及びその歴史的・政治的背景の分析・考察を通じて、雄弁とマルクス主義・階級闘争との接点という近代日本のレトリック研究のブラインドスポットを埋めることを目的とした。主な成果として、（1）近代日本のプロレタリア雄弁およびそれに関連した一次・二次資料の整理およびデータベース化、（2）プロレタリア雄弁の理論的分析および歴史的考察の学術論文を通じた公表・共有があげられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、近藤栄蔵が唱えた「プロレタリア雄弁」のレトリックとしての特徴及びその歴史的・政治的背景の分析・考察を行なった。日本の近代レトリック史研究はこれまでその多くが明治期に関するものであり、大正・昭和初期は近代日本のレトリック史におけるブラインドスポットであった。大正・昭和初期においても、確固たる政治レトリックの実践がその時代に存在したことを証明した本研究の学術的意義は高い。加えて、日本の文脈における無産階級による雄弁、またマルクス主義・階級闘争とレトリックの接点についてはこれまでほとんど論じられておらず、日本のレトリックに関する未着手の課題に挑んだという意味でも、本研究は意義深い。

研究成果の概要（英文）：This study explored the relationship between rhetoric and Marxism and class struggle through analysis of "proletarian eloquence" professed by Eizo Kondo, a founding member of the Japanese Communist Party. The main achievements of the study are (1) the creation of the database of primary and secondary sources on proletarian eloquence and related themes in modern Japan, and (2) the scholarly papers analyzing, and offering historical reflections on, proletarian eloquence as a powerful rhetorical force in early modern Japan.

研究分野：コミュニケーション研究

キーワード：プロレタリア雄弁 レトリック 近藤栄蔵 マルクス主義 プロレタリアート 無産政党 日本共産党
雄弁

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

「どんな場合でもそのそれぞれについて可能な説得の方法を見つけ出す能力」(アリストテレス『弁論術』)として古代地中海世界に生を受けたレトリックは、紆余曲折を経ながらも中世、近代、そして現代へと継承された。その高い汎用性故、歴史の転換期において様々な主体により重宝されてきたレトリックだが、近年、特に20世紀の「階級闘争」の武器としての働きが研究者の注目を集めている。Vladimir Lenin、Emma “Red” Goldman、Ho Chi Minhらをはじめとする歴史上重要な社会・共産・マルクス主義指導者・活動家のレトリック実践(雄弁・弁論・演説・宣伝・コミュニケーション戦略等)の研究が発表され、さらにはレトリックとマルクス主義・階級闘争との接点をめぐる理論的論争も学術誌上を賑わせてきた。

ただし、日本の文脈における階級闘争の武器としてのレトリックに関する私たちの知見は限られていた。明治初期、西洋より日本に輸入されたレトリックが、自由民権運動の盛り上がりの中で「辯舌を以て政府を罵倒せ」ん(外骨『明治演説史』(1929(昭和4)年、成光社刊))とする「過激」なコミュニケーション実践として大衆を熱狂させ、その後明治後期・大正にかけ全国に弁論ブームを巻き起こしたことは広く知られている。一方、やはり明治初期、日本に持ち込まれたマルクス・エンゲルスの思想は当時の知識層に多大なる影響を与えた。その後の社会主義・共産主義・無産政党の設立、また大正・昭和初期にかけての「プロレタリア文学運動」等、マルクス主義が当時の政治文化における主要な潮流の一つであったことに疑いの余地はない。それにも関わらず、日本におけるレトリックとマルクス主義・階級闘争との接点を扱った研究・論考はほとんど見当たらない。殊に演説・弁論・雄弁については、政治演説会に参加したプロレタリア文学者の雄弁等、断片的なエピソードの羅列の域を出ない。波多野完治が「大正デモクラシーとやらんで日本国民の政治意識の高揚した昭和初年、すなわちマルクス主義の「宣伝扇動論」に、演説の地位が確立されていなかったこと」(「日本のレトリック」『思想』532号(1968年))を日本のレトリックの「不幸」として挙げるほどである。

このような状況下、研究代表者である青沼は近藤栄蔵(1883~1965)著『プロレタリア雄弁学』(1930(昭和5)年、平凡社刊)に関する論考を2013年に2編発表した。『プロレタリア雄弁学』は、闘争の武器としての雄弁を無産階級に指南する世界でもあまり類を見ないテキストであり、日本におけるレトリックとマルクス主義との確固たる接点の存在を示す「物的証拠」と言える。「Dialectic of/or Agitation? Rethinking Argumentative Virtues in Proletarian Elocution」(*Virtues of Argumentation: Proceedings of the 10th International Conference of the Ontario Society for the Study of Argumentation* (2013))では、日本共産党(第一次)の創立メンバーであった近藤が説く「プロレタリア雄弁」を議論レトリックの見地より考察し、また「Discerning Connections: Proletarian Elocution, Rhetorical Invention, and Trans-Pacific Communication」(Annual Convention of the National Communication Association (2013), Washington D.C., USA)では、米国留学時代(California Polytechnic School)に近藤が参加したディベート・スピーチの課外活動(forensics)とその後のプロレタリア雄弁との関係を論じた。これらの研究を踏まえ、近藤の唱えたプロレタリア雄弁のレトリックとしての特徴及びその歴史的・政治的背景をさらに深く、またより包括的に分析・考察することで、雄弁とマルクス主義・階級闘争との接点という近代日本のレトリック研究のブラインドスポットを埋めるべく企画されたのが本研究である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまでほとんど論じられることがなかった日本のプロレタリア雄弁について、一次および二次文献・資料を収集・整理し当時の歴史的・政治的文脈を再構成するとともにその理論的特徴について考察し、その成果を研究報告や学術論文を通じて国内外の研究者と共有し、また助成期間最終年度には研究書の出版企画書を作成することであった。

まず日本のプロレタリア雄弁またその歴史的・政治的文脈に関する文献・資料について、法政大学大原社会問題研究所・社会労働問題アーカイブズ所蔵の明治期から昭和初期にかけての社会主義・共産主義運動また社会主義・共産主義・無産政党の活動に関する資料、加えて近藤栄蔵に関しては、同志社大学人文科学研究所に置かれている近藤の遺族寄贈の膨大な資料アーカイブ（「近藤栄蔵文庫」）、さらには国会図書館・憲政資料室所蔵の公文書（特に米国統治下の日本関係資料の一部である「コミンテルン文書・日本共産党ファイル」）を中心にあたることとした。

また近代・現代の雄弁史に関する資料またレトリック理論に関する論文・書籍については、研究代表者が既に所有する以外の必須資料を、必要に応じ収集（複写、購入等）することにした。

なおこれらすべての資料は、データベースを作成し整理を行うこととした。

これらの文献・資料の考察・分析の結果は、国内外の学術雑誌への投稿や学会・研究会報告を通じ他の研究者と共有され、学会・研究大会での意見交換を通じ、レトリックとマルクス主義の接点に関するさらなる研究課題の発見、加えて国外での研究書出版に関する情報を得ることを期待した。

3. 研究の方法

上記の目的を達成すべく、本研究では以下の手順で研究を進めた。

（1）助成期間の初年度は法政大学大原社会問題研究所および国立国会図書館にて出張・アーカイブ調査を行い、第2年度は同様の調査を同志社大学人文科学研究所にて行った。閲覧した資料は可能な限り複写をした。加えて関連する歴史的文献（古書等）、また古典・現代レトリックの理論的枠組みに関する図書・資料を主にインターネット等の通信販売を利用し収集した。それら資料は新規購入したパーソナルコンピュータを用い整理・データベース化した。

（2）考察・分析結果の公表・共有については、助成期間中、国内では日本コミュニケーション年次大会、国外では National Communication Association 研究大会（米国）、Rhetoric Society of America 研究大会（米国、ただしオンライン開催）、International Society for the History of Rhetoric 研究大会（オランダ）での論文発表・口頭報告を中心に行うこととした。なおそれらの論文・報告は、助成期間終了後出版が計画されている研究書の一部とすることを念頭に準備・執筆された。

4. 研究成果

「プロレタリア雄弁」のレトリックとしての特徴及びその歴史的・政治的背景の分析・考察を通じて、雄弁とマルクス主義・階級闘争との接点という近代日本のレトリック研究のブラインドスポットを埋めるべく行われた本研究の主な成果は以下の通りである。

（1）文献・資料については、最終的に約250点収集することができた。それらは一次・二次資料別、言語別（英語・日本語、一部ロシア語）、またテーマ別の小見出しを用いて整理・データベース化され、また資料自体も可能な限り電子化（PDF形式、JPG形式等）を行なった。これらの作業を経て、収集された資料の全てが今後の研究に役立てることができる状態となっている。収集された資料の中には、1925年（大正15年）の普通選挙法公布以降、無産政党が全国で主催した「政治教育学校」に関する内部資料、さらには戦後日本における政治演説・雄弁の位置

付け等、現代日本のレトリックに関する未着手の研究課題を示唆するものもあり、実り多き研究となった。

(2) Rhetoric Society of America 研究大会 (2022 年 5 月) にて発表した論文「Proletarian Elocution and the Rhetorical Left: Charging the Rhetoric for Change in Early 20th-Century Japan」では、近藤栄蔵の唱えるプロレタリア雄弁がいわゆる直接行動による「革命」よりも議会選挙を通じた「改革」のためのレトリックであることを明らかにした。そしてこれは、『プロレタリア雄弁学』の発刊から先立つこと 6 年、近藤が堺利彦との共著『無産階級と議会』(1924 (大正 13) 年、燎原社刊) で表明した「議会政策派」的な立場とも一致することを指摘した。

(3) 日本コミュニケーション年次大会 (2022 年 6 月) にて発表した論文「レトリックとアジ・プロの間に—近代日本のプロレタリア雄弁の予備的考察」では、近代日本のレトリックおよび大正・昭和初期のマルクス主義運動に関する先行研究を整理するとともに、ワイマール時代、マルクス主義を掲げるドイツ社会民主党 (SPD) の要請を受け Eduard David が著した *Referenten Führer* (1907) 等、海外における社会主義・共産主義的雄弁と近藤のプロレタリア雄弁との比較の意義を論じた。

(4) International Society for the History of Rhetoric 研究大会 (2022 年 8 月) にて発表した論文「Beyond Marxian Commonplaces?: The Case of Japanese Proletarian Elocution」では、近藤の雄弁・レトリック理論、特に古典レトリックの五分科の一つである「発想 (inventio; invention)」へのアプローチは多分に「唯物論」かつ「帰納的」であり、古典レトリックの常套手段である「演繹的」な議論展開、特にトポス (topoi; loci; commonplaces) 概念に対する懐疑論が『プロレタリア雄弁学』では展開されていることを指摘した。

(5) National Communication Association 研究大会 (2022 年 11 月) にて発表した論文「From Extra-Parliamentary Opposition to Electoral Politics: Proletarian Eloquence in Early 20th Century Japan」では、近藤のプロレタリア雄弁が、当時非合法化され地下活動を余儀なくされた共産党 (員) ではなく、合法的な「無産政党」からの立候補者の選挙活動を念頭に執筆されたことを指摘した。そして平凡社といういわゆる「メジャー」な出版社より刊行された『プロレタリア雄弁学』に多くの「伏字」が見られるのは、近藤が当局の検閲を受け入れ、プロレタリアートのレトリック実践があくまでも合法的な政治活動の一環であったことを論じた。

(6) 日本コミュニケーション年次大会 (2023 年 6 月) にて発表した論文「近藤栄蔵・議会主義・無産政党—近代日本のプロレタリア雄弁の予備的考察その 2」では、昭和初期、日本全国で開催された無産政党主催の政治学校の教育カリキュラムに雄弁学が含まれており、その教育には近藤のみならず、早稲田大学雄弁会出身で、第二次世界大戦後に日本社会党書記長となる、若き日の浅沼稻次郎が深く関わっていたことを指摘した。その上で浅沼のいわば「和製」プロレタリア雄弁と、米国のディベート・スピーチ活動経験者である近藤のプロレタリア雄弁の比較検討を行なった。

(7) 今回の助成研究の成果の書籍化を目指すべく出版計画書 (book proposal) の作成に着手した。仮題を *Eizo Kondo and Proletarian Eloquence in Early Modern Japan: Translation and Commentaries* とし、第一部を『プロレタリア雄弁学』の完全英訳、第二部を上記 (2) から (6) までの論考に加筆修正を加え再編した論考とする計画である。現時点で出版社は未定だが、米国 University of California Press、Michigan State University Press、University of South Carolina Press 等レトリック史に関する書籍をこれまで多く刊行している出版社に計画書を提出することを考えている。なお『プロレタリア雄弁学』の著作権保護期間が既に満了していることは、公益財団法人著作権情報センターに確認済みである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 青沼 智	4. 巻 50
2. 論文標題 コロナ（禍）とコミュニケーション--レトリック・議論研究からの考察--	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本コミュニケーション研究	6. 最初と最後の頁 91～102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20698/comm.50.Special_91	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 青沼 智
2. 発表標題 近藤栄蔵・議会主義・無産政党 近代日本のプロレタリア雄弁の予備的考察その2
3. 学会等名 日本コミュニケーション学会年次大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Satoru Aonuma
2. 発表標題 Between IS and AS: Legal Fiction as Rhetorical Argument
3. 学会等名 International Society for the Study of Argument (ISSA) 10th Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Satoru Aonuma
2. 発表標題 From Extra-Parliamentary Opposition to Electoral Politics: Proletarian Eloquence in Early 20th Century Japan
3. 学会等名 National Communication Association Annual Convention (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 青沼智
2. 発表標題 レトリックとアジ・プロの間に--近代日本のプロレタリア雄弁の予備的考察--
3. 学会等名 日本コミュニケーション学会年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Satoru Aonuma
2. 発表標題 Proletarian Elocution and the Rhetorical Left: Charging the Rhetoric for Change in Early 20th-Century Japan
3. 学会等名 Rhetoric Society of America 18th Biennial Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Satoru Aonuma
2. 発表標題 Beyond Marxian Commonplaces?: The Case of Japanese Proletarian Elocution
3. 学会等名 International Society for the History of Rhetoric 23rd Biennial Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Dale Hample (ed.)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 538
3. 書名 Local Theories of Argument, Chapter 44 (Satoru Aonuma, "Shinzo Abe's Not So Beautiful Lies, or How He Stopped Worrying About Embarrassing Himself in Public") (pp.292-298)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------